

いずみさの昔と今 第359回

「チラシ広告の元祖 引札」

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさのでは、10月4日(土)より企画展「正月引札・広告印刷物に見る佐野の商店」を開催します。今回は、「引札」とはどんなものなのかを紹介しします。

引札とは江戸時代から大正時代にかけて、店の開店や売り出しを宣伝するために配った印刷物です。現在のチラシ広告と考えることができます。

引札という名前の由来は諸説ありますが、辞書によると「引く」には「配りあてる、配布する」という意味があることから、多くの人に配る札としてこの名前がついたとする説や、客を「引く(呼び込む)札」であるとする説があります。もともとは「口上書」「書付」など様々な呼び方をされていましたが、文化・文政期(1804～1830年)ごろになると引札という呼び方が一般的になったとされています。また、喜多川守貞が嘉永6(1853)年に、大阪・京都・江戸の文化や風俗を記した「守貞謄稿」によると、江戸では「引札」と、京阪では「チラシ」と

呼ぶとも書かれています。

当初の引札は墨による一色で刷られ、店への呼び込みや商品の効能といった説明を文字で記した「読ませる」ものでした。不特定多数の人に配ることを目的としていたため、当時の暮らしに不可欠であった厩に店情報などを刷り入れ、受け取ってもらえるように工夫していました。その後引札は、色をつけた「見せる」ものへと次第に変化していき、文化・文政期に入ると錦絵に代表される多色刷りが盛んになり、色鮮やかな引札が増えてきます。

そして明治時代、特に明治20年代に入ると「正月引札」の印刷が爆発的に増えます。その背景には印刷技術の発展や、業者数の増加という要因がありました。

梅といった縁起のいい動植物、「富士」「鷹」「茄子」「高砂」などのおめでたいテーマが選ばれました。また、「藻を刈る」「儲かる」「芽出鯛」「めでたい」といった語呂合わせの図柄も描かれました。

引札を受け取った客は、家の壁や柱などに貼り、その美しさや内容を鑑賞して楽しみました。また、古い引札を壁紙や襖の下張りに使うなど再利用する家もありました。

今回の展示では、歴史館所蔵の正月引札などを展示します。市内や周辺地域の商店が印刷・配布した引札もあり、かつての街の暮らしぶりや雰囲気を感じられます。



▲新川呉服店の引札
明治40(1907)年頃

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日 月曜日、毎月最終木曜日(いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館)
開館時間 午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
入館料 無料

泉佐野 レトロ タイムスリップ

泉佐野市の昭和頃の懐かしい写真を紹介します。

⑪駅シリーズ 南海 羽倉崎駅



▲昭和27年頃の羽倉崎駅の写真。羽倉崎駅は明野陸軍飛行学校佐野分教所の陸軍佐野飛行場の建設に関わる人々や建設機材を輸送するため、昭和17年に開設されました。



「泉佐野市史研究」第2号
横山論文より引用

▲陸軍佐野飛行場と南海 羽倉崎駅(赤い囲み)の位置がわかる地図(左が海側)



▲現在の羽倉崎駅前の様子

泉佐野市の懐かしい写真は「泉佐野市デジタルアーカイブ (<https://adeac.jp/izumisano-city/top/>)」でも公開中！